

## 明治初期の博覧会等に出展されていた越中・立山の天産物について —近世本草学から近代博物学、物産学への過渡期の実態を中心に—

吉野 俊哉

### はじめに

近世に隆盛した日本の本草学は明治以降、生薬やその効能に関する事柄を措き、近代の博物学や物産学に取って代われ、近代化を進める中で整備された高等教育機関で研究の対象とはされなかった。一方、明治以降の近代博物学は、近世本草学が蓄積してきた知識や経験を取捨選択しながら、新しい研究方法によって専門性を高めていった。この、天産物を対象とした新旧の学問は、明治初期には混在しつつ主役が交代する「過渡期」があったはずだが、具体例を挙げてその実態を比較した論考はまだ見られないように思われる。

小論では、この新旧の接点に位置する事例として、近世に本草家たちが開いていた「薬品会」や「物産会」（以下、同種の催しを総称して「薬品会など」）や、同種の催事である明治初期に国内各地で開かれた博覧会や、明治政府が初めて参加したウィーン万国博覧会（明治6（1873）年）に出展された天産物の種類に着目する。

宝暦の頃から、主に天産物<sup>1)</sup>を一室に展示して供覧させる「薬品会など」が江戸、京都、大坂、名古屋などを中心として開かれるようになってから幕末まで約100年の間、規模の大小は様々だが出展品の種類や天産物に対する価値観には大きな変化はなかつ

たようである。ところが、明治維新後10年ほどの間に開かれた様々な博覧会では、出展品にはそれ以前にはなかったような質的な変化が生じている。この新旧それぞれの催事に見られた出展物の種類や質の違いには、近代以降の天産物に対する価値の変化があり、それは同時に催事を観る側の人々の意識の変化を伴っていった。

この点を踏まえて、幕末に開かれた「薬品会など」と明治初期に開かれた国内外の博覧会（展覧会）について、それぞれの出展目録<sup>2)</sup>等を調査したところ、その何れにも立山山域の他、越中各地から産出採集された天産物（以下、これらを総称して「越中・立山産品」）が出展されていたことがわかってきた。出展数全体に対して数は多くないが、その種類や傾向などから、新旧それぞれの催事の性格や天産物に対する価値観の違いが見えてくるのではないかと考えた。

そこで次章以下、「越中・立山産品」について、まず近世本草学の天産物に対する視点を整理する。さらに、新旧の催事に展覧されていた「越中・立山産品」を具体的に比較し、それぞれに特徴的な天産物に対する見方から、近世本草学から近代博物学・物産学への過渡期の一面を概観したい。

### 1. 近世本草学の中の「越中・立山産品」

#### 1-1. 本草書等への記載の実態

近世以降、日本で作られた本草書の中には、生薬の薬効とともに産地や品質の良否を評した内容が見

られる。これは、古文献に依拠する文献学的内容に加え、薬草の産出や品質に関する情報も加わった、実用的な本草学の一端を示すものであろう。このよ

うな記載の背景には、各地の産物情報が地方から中央の本草家へ流れていたことがある。それだけではなく、後には本草家が自ら山野を跋涉して薬草を見分け、その成果や経験の蓄積による、実証的な記述が多くなっていく。

そこで、江戸中期頃までに作られた本草書の記載で、立山山城を産地に挙げる産物を調査してみた。管見した中では『炮炙全書』（元禄2（1689）年）や『大和本草』（宝永6（1709）年）では「當歸」や「硫黄」が<sup>3)</sup>、また『広大和本草』（宝暦5（1759）年）では「禹余糧」、「鬼火」、「骨碎補」の記述が見られた<sup>4)</sup>。但し、何れも名産地として立山を特記したもののではなく、立山でもそれらが採れると付記したまでのものであった。この事実が示すように、この頃の本草書の中での立山の存在感は薄く、『和漢三才図会』（正徳3（1713）年）のような大部のものでも、五箇山で生産される煙硝や加賀黄蓮として知られた医王山の黄蓮、加賀（砺波郡）の瑪瑙の他、立山山城では亀谷鉞山の鉛などを挙げるに過ぎなかった。

このように、同時代の伊吹山や奈良、熊野などと比べて「越中・立山産品」の記述が少ないのは、書籍の他、門下の弟子や薬種商などを介して入手できる情報の偏りも一因に考えられよう。加えて、この頃の本草書の記述自体『本草綱目』に依拠した名物的な生薬の同定が主であり、産地情報の重要度はまだ高くはなかったこともあろう。産物とその生産地を重要な情報とするのは、後に流通の際の価値にその意識が高まって以降のことと考えられるからである。

享保以降、幕府は各地に採薬使を派遣して有用な薬種を探索し、江戸の薬草園で試験栽培したり『諸国産物帳』の編纂を理由に各地で産物調査を行わせたりする。また諸藩には独自に領内の物産開発、商品化を進めるところも出てくる。このような事例に比例して、山野を調査し有益な天産物を流通させる上で本草書に物産学的な記載が多くなっていく。こ

の背景には、産地による品質の違いが商品価値に反映されてきたことも関係しているであろう。

宝暦7（1757）年には本草家の平賀源内らが江戸で第1回の薬品会を催した。宝暦12（1762）年に開いた第5回東都薬品会で配られた引き札には、「此会の主意は、只今まで漢渡のみにて我国になき品も、深山幽谷尋求の時は又なきにしもあらず。しかはあれど、道遠き国々を一々尋んとするも煩しく、又ことごとくは至るべきにもあらざれば、其国々の人にたよりて産する処のものを得て是を考る時は、諸本草書并にどどにゆうすころいとぼつく<sup>5)</sup>といへる阿蘭陀の本草書に出るところ、大体は外国より渡らずとも日本産物にて事足りなん」と、開催の意義を述べている。これは幕府が政策的に朝鮮人参の国産化や、未確認生薬の搜索を企図していたことと、会の趣旨も時代もまた合致している。源内の開いた会が回を重ねて拡大したことも、それを求める時代の要請があったことの証左と見る。そしてこの時は三都の他、越中を含む全国25箇所に産物取次所を設けて組織的に出品物を集める手法がとられたことも特筆される。「薬品会など」を通して、組織的な調査とは違う形で各地の産物に関する大規模な情報集積を行っていたわけである。

「越中・立山産品」については、江戸で源内が開いた5回に亘る薬品会での主要な出展物360種余りの名称と、その産地を載せた『物類品隲』（宝暦13（1763）年）に五箇山産の「牙消」<sup>6)</sup>の記載があるのみであった。

本草書の実学としての価値は、単に薬草産地の情報ではなく、そこで採れる薬種（産物）の品質が確認できることである。そして産地が広く知られるか否かには、品質と流通量が反映していると思われる。早い内から領内の有用産品として藩が管理して産出し、量的にも質的にも藩外で知られていた「加賀黄蓮」「瑪瑙」「煙硝」などは、これに当たるだろう。逆に初期の本草書に越中・立山山城を産地とする薬

種の記述が少ないのは、組織的な調査が行われなかったことによる情報不足や、藩外への流通の有無が関係していたのではないかと推測する。

## 1-2. 調査に基づく「越中・立山産品」の実態

### 1-2-1. 加賀藩や幕府採薬使による領内調査

立山山城での薬種が産物として記録されるのは、加賀藩による産物調査や採薬使らによる薬草見分を待たなければならない<sup>7)</sup>。貞享2(1685)年に加賀藩は物産開発を目論んで独自に領内の調査を行い、その結果を『加越能所産薬種考』<sup>8)</sup>にまとめた。その中で、ほとんどの薬種が産地を大まかに加賀、越中、能登と国名のみ記しているのに「硫黄」については「立山産」と産地名を付記している。添え書きに「微妙院様御代立山より御取寄被遊候を見申候に上品ノ目と申物にて他国にも希なる由物語承申候」とある点にも注目すると、この調査が行われる40年以上前の微妙院(2代藩主前田利常 藩主在位1605~1639)の頃には、既に藩では立山の硫黄に産物として関心を持っていたことがわかる。

また、幕府採薬使と随行した薬草見習人らが享保7年に立山で薬草を見分けた結果は、絵図を作成し、藩の本草学者がさらに詳細に解説を加えてまとめられ、その後も利用されていたと見られる<sup>9)</sup>。

このような、藩による調査は成果を藩外に出すものではないが、この時点で意図的に情報がまとめられていたことの意味は大きかったと考える。

### 1-2-2. 『諸国産物帳』のための調査

享保年間には、幕府から丹羽正伯の指示で全国的な産物調査が行われた。指示を受けた各藩では領内の動植物、鉱物などの産物について幕府からの照会に対して、先ず村ごとに報告を出させ、それを郡ごとにまとめていき、最終的に領国全体の情報を集約した報告書を作成していった。

立山山城については、芦峯寺一山から加賀藩寺社

奉行宛に芦峯寺及び立山山城の産物を書き上げ、享保20年に提出された『越中分／産物書上帳／立山／芦峯寺』<sup>10)</sup>が残る。これには31種の動植物、鉱物が「木之類」「菓之類」「草之類」「鳥之類」「獣之類」「蛇之類」に分けて挙げられているが、山中に自生する樹木や山草の他、雷鳥や熊、まむしなど現地に生息する動植物を挙げるだけでなく、麓の村で栽培される豆や根菜など作物の記述も含まれている。しかし一方で、既に知られていたはずの薬草などの記載はない。加賀藩寺社奉行から調査を指示した文書が残っていないため経緯は不明だが、実際に調査を行った際、当然自生する薬草は多数あったにもかかわらず、薬草自体を書き上げるべき重要な対象とする認識度は低かったとも考えられる。

### 1-2-3. 本草家らによる私的な調査

さらに時代が下ると、本草家による山野での調査の目的が薬草の植生に限らず動植物相の把握に広がってきたこともあり、博物的な目で「越中・立山産品」が認識されてきた。

この主目的は、薬草の有無の確認でも天産物の商品化でもなく、自身の博物知識を深める実習であったことから、立山は「本草修行の山」として他国から本草家が訪れ、植生を記載する事例が現れる。

享和3(1803)年に刊行された『本草綱目啓蒙』では、薬種の産地は重要な項目であり、一つの薬種に対して産地による品質の差や異種の存在、異名(方言名)などを列挙している。越中や立山を産地として挙げる他、越中の方言名が別記されるものが見られる。しかし、小野蘭山や小野職孝自身が立山を訪れて採薬を行ったにもかかわらず、同書には立山山城の薬種を特記していないところに、依然として薬種産地としての立山の認識度の低さが見える。

この他には、紀州の本草家畔田翠山が文政5(1822)年に立山で採集した草木の腊葉標本<sup>11)</sup>を製作するとともに『立山草木志』<sup>12)</sup>を著し、立山の動植物を記

載している例、京都山本読書室の山本章夫が嘉永4(1851)年に立山を訪れた際『入越日記』に立山山域の詳細な植生を記録するとともに、それらを写生した図譜を作成している例などがある。残された史料を見る限り、この畔田翠山と山本章夫の採葉は、葉種の発見ではなく立山山域の植物相の調査を目的としたものだったことがわかる。

### 1-3. 「薬品会など」へ出展された「越中・立山産品」

近世後期以降から幕末にかけて各地で開かれた「薬品会など」では、会ごとに出品品の目録が作られた。生薬よりも、多くの場合は珍奇な動植物、鉱物、化石などの天産物が中心で、名称は産地名と共に出品者別に載せられたものがほとんどである。また、「薬品会など」は展示とともに品評会でもあり、会場で出品品を評した評語を付記した目録を刊行した場合も多い。

この、出品者ごとの記載が示すように、出品品は出品者の個人的な博物コレクションによるもので、多くが奇石を愛好したり珍しい草花を愛でたりする当時の趣味的な価値観が反映したものであった。

それらの目録の中にも越中・立山で採集した岩石や化石、高山植物などが見られる。具体的な事例として、幕末期に組織的な物産会を定期的で開催し、その目録がまとまって残されている京都山本読書室物産会での展示品から「越中・立山産品」を抄出したものが表1である。

8割以上を博物趣味的な品物が占めている点に、この時代の本草学による天産物認識の特徴が見える。出品品の多くは師弟関係を通じて各地の博物サークルとの情報や品物の交換、購入して入手されたものである。

立山産「硫黄」、五箇山産「塩硝」、砺波郡産「瑪瑙」、「木葉石」などは他所の「薬品会など」でもよく見られ、それらの産地は比較的知られていたもの

表1 京都山本読書室物産会

名称	採集地	分類
石硫黄	立山地獄谷	Cう
コガ子石	越中立山金(コガ子)坂	Cう
絶頂石	立山権現前	Cう
長石	立山二ノ越	Cう
モフキイシ	越中立山	Cう
山姥ノ握飯	越中	Cう
水晶	越中立山	Cう
雷斧	越中立山	Cえ
矮生玫瑰	立山	Cい
三葉黄蓮	立山	Cい
白根ニンジン	立山	Cい
立山フグリ	立山	Cい
御前タチバナ	越中立山	Cい
細葉岩松	立山	Cい
岩菊	越中立山	Cい
岩ゼンマイ	越中伏木源義経ノ避雨巖	Cい
菊葉黄蓮	越中二上山	Aい
川黄蘗	越中	Cい
瑪瑙髓	越中城端	Cう
金瑪瑙	越中	Cう
硝石	越中五箇山	Bう
タイマイ	越中徳光浦 <sup>13)</sup>	Bあ
一寸オコゼ	越中魚津	Cあ
石蛤	越州	Cう
豆斑石	越中	Cう
シヽミ介	越中高岡	Cえ
アセ介	越中	Cえ
石蚌	越中	Cえ
海燕化石	越中	Cえ
瓢筆イシ	越中布施圓山	Cう
自然銅	越中	Bう
木葉石	越中	Cう

表1、表2、表3 凡例

- ・名称のゴチックは、立山産出のもの。
- ・採集地は、史料にあるままの表記
- ・分類は、A：薬種、B：産物として流通するもの。  
C：A、B以外の博物的な趣味による品物  
あ：動物類、い：植物類、う：鉱物・岩石、  
え：化石・考古遺物類

と見える。特に「硫黄」、「煙硝」は早くから本草書の記述に見られ、全国に知られていた。その他の岩石類では、採集地を限定した記念品扱いの石があったり、瑪瑙、水晶、山姥ノ握飯、山姥鑿など色や形を評する弄石趣味が反映しているようである。

植物に高山植物が多いのは、この時代の園芸ブー

ムを背景に庶民の関心が高かったことと関係があるだろう。出展時に鉢植えか腊葉だったのかは不明だが、読書室当主山本章夫自身が立山で採葉を行った際の収集品だったと見られる。

岩石類については鉱物と考古遺物が同列で扱われていたり、登山中に採集して採集地から命名した岩石のように、多種様々な来歴を持つ博物趣味が見られた点などにも、この時代の「薬品会など」の出展品の特徴がよく現れている。

#### 1-4. 弄石家の「越中・立山産品」

次に、近世後期本草学の博物趣味では木内石亭や木村兼葭堂を代表とする「弄石家」の存在は大きく、全国的な同好者のネットワークと情報量は近世後期の学芸活動の展開では無視できない。木内石亭や木村兼葭堂のコレクションの中にも越中・立山産の岩石類があり、『雲根志』や『兼葭堂日本石譜<sup>14)</sup>』には具体的な記述がある。

表2 『雲根志』所載の越中・立山産品

名称	採集地	分類
石炭	越中立山	Bう
石硫黄	越中立山の地獄	Bう
山姥糞	地獄谷	Bう
切子砂 <sup>15)</sup>	越中立山	Bう
山姥鑿	越中	Cう
材木化石	足倉	Cう
諸物化石	越中伊奈川郡ソブ川牛嶽 <sup>16)</sup>	Cうえ
青塩消	越中	Cう
貝石	唐島	Cえ
瑪瑙	城端	Cう
鼓石 <sup>17)</sup>	越中砺波郡林道寺	Cう
木葉石	城端	Cう

表3 『兼葭堂日本石譜』所載の越中・立山産品

名称	採集地	分類
切子砂	立山	Cう
鉛礦		Cう
青馬瑙	高岡ヨリ八里山中	Cう
焰硝		Bう
半貝石	唐島	Cう
馬瑙	高岡ヨリ八里山中	Cう
鼓石	砺波郡林道寺	Cう

表1と同様に鉱物、化石、宝石類、考古遺物、形状が珍奇な石など様々な種別が混在するこれらの品々は、当時の博物サークルの中ではよく知られた博物的な本草学での岩石類の認識の典型である。

「薬品会など」の出展品のほとんどが博物的コレクションで、資源的な価値が考えられる物は「硫黄」や「煙硝」程度である。「自然銅」「鉛礦」など資源と考えることもできるが、おそらくは外見の色や形の妙を愛でる意味での出展だったと見られる。

以上のような本草書の記載を総括すると、「越中・立山産品」の認識度の低さの背景には、立山に自生する薬種が詳しく調査され、産地として知られるのが遅かったこと。硫黄を除いて、流通して特産物として知られる要素がなかったことが挙げられよう。そして、フィールド調査が盛んになって、本草家が私的に各地の山々で採葉を行うようになって、ようやく博物的な目で植物相が知られるようになったのを見る。このことは「越中・立山産品」については、享保から幕末にかけて時代が下るにつれて薬種<産物資源<博物の順に記載数が増えていることからわかる。このような経緯から当時の本草家にとって、立山は薬草の山というよりも博物の山としての認識が強かったのではないかと考えられる。

#### 1-5. 近世本草学の視点分化と対象の広がり

これらの事例から見えることは、実証的な近世本草学による天産物の見方が「薬効に注目した生薬の有無」から「流通も視野に入れた商品価値のある天産物の有無」、そして「薬効でも商品価値ではなく、広く動植物、鉱物を観察・収集する博物的な視点」へと拡大していったということである。

例えば、『本草綱目』に依れば「黄蓮」は根茎が薬効を持つ「生薬」であるが、採集して流通させる段階では「産物」であり、植生や形状を観察し腊葉や絵図にすれば「博物(標本)」として扱われるといった見方である。天産物が全てこの三様の価値を持つ

ものではないが、この三様の見方を一括りで論じてしまうと近世本草学の立体的な展開の流れが見えにくくなる。

近世後期には、博物的な視点が大きく開花し本草学は博物学になってしまったという見方もされる。

しかし、元来本草学は民生厚用に益するために天産物を見分ける学問であり、それに役すること全般をその範疇にする。だから植物の生態や生育に関することも、草木とその名称を照合することも、やはり本草学の括りで捉えていた。この点は近代科学が人文・自然という分野で研究対象を括って観察や分析を行うものとは違う体系であった。

このような西洋の博物学との違いについて磯野直秀氏は、近世本草学は外部形態の観察に終始し内部の形態への関心が薄かったこと。実験による実証的な態度がなかったこと。自然分類が試みられなかったこと。珍しい事物の所有・展示に力点があり、標本の持つ学問的な意味の認識が薄かったことなどの点を指摘している<sup>18)</sup>。

この違いを前提として両者を比較するためには、近世本草学の蓄積が近代のどのような分野の学問に、どのような形で、どの程度取り込まれていったのかを指摘しておく必要がある。

そのために先ず、近世本草学の質的な広がりや「生薬学」「物産学」「博物学」の三領域から別々に捉えてみる。

「生薬学」は本草学が中国から伝来以来の本来的領域で、薬種を対象に和漢薬を臨床に応用する実用知識である。「物産学」では、薬用に限らず人に役立つ天産物を探索し、生産（採集）、商品化し流通

させることを目的とする。さらに「博物学」は対象とする自然界への理解を一層深め、その興味は趣味的な学芸活動全般に亘って好奇心を満たす活動と考える。近世後期以降は、本草学の括りの中でこれらの領域が混在し、相互に情報を共有しながら隆盛していったと見る。時代が下るに従って博物的な内容、物産学の比重を高く論じてしまうが、本来の生薬学としての役割は決して軽視されたわけではない<sup>19)</sup>。

明治以降の展開の中では、生薬の領域は西洋医学の分野に代わるものがないので、西洋医学とは一線を画して和漢薬の伝統を継承している。その一方、「物産学」は、本草学の実学性を発展的に継承し、天産物を資源として捉えることで近代化の殖産政策の推進に生かされていく。

そして近世本草学を特徴付ける「博物学」の領域は、それまでの自然界の動植物や鉱物の記載を近代の学問体系の視点で取捨選択し、研究手法を新にしていく。その中で形を失い生物学や考古学、鉱物学などに取り込まれて、結果として学問的な充実に資することになった。

そして、ここでの「博物学」の展開をさらに細かく見るならば、それは趣味的な博物サークルの中で、楽しみながら好奇心を満たしていったアマチュアリズムに表れていた部分だが、これこそが日本で独自に隆盛した近世本草学の要諦部分であったと見る。近代以降、これは好事家の余技レベルで継承されていくが、高等教育の中でこの部分を学問体系から切り離し専門性を高めていく過程にこそ、新旧の過渡期の特徴が最もよく表れていると考えるからである。

## 2. 明治初期の博覧会に出展された「越中・立山産品」

### 2-1. 博覧会と「薬品会など」の接点

日本人が目にした最初の西洋の博覧会(exposition)はロンドン万国博覧会(1862)年であった。後にフラ

ンス政府からの慶応3(1867)年のパリ万国博覧会招請を機に西洋の博覧会の実態を知ることになる。幕府はその招請を受け出展を決定するが、これが初め

て日本が出品した万国博覧会とされる。

フランス公使レオン・ロッシュが参加依頼のため幕府を訪ねた際にexpositionの和訳を尋ねられ、内容を聞いた栗本鋤雲は「薬品会」を思い浮かべ、それを「博覧会」と訳したと言われている。おそらくその時にイメージしたのは「品物を一堂に展示して、広く供覧させる」というシステムだけではなかったと思われる。

栗本鋤雲は、昌平坂学問所で学んだ後奥詰医師や幕府医学館で講書を務めているので、当然栗本が思い浮かべた「薬品会」とは幕府の医学館（躰寿館）が開いたものであったはずである。躰寿館での薬品会は天明年間からほぼ毎年開かれていた。その出展目録の写本『躰寿館薬品会略目』<sup>20)</sup>（開催年は不明）を見ると「此外メヅラシキ薬品甚ダ多シ是レ即チ其ノ中ノ万ガ一ナリ」と但し書きした上で、出展物から抄出した130点余の品名と部分的なスケッチが記載され、出展者には桂川周甫、多紀元簡、小野蘭山などの本草家の名がある。ここでの出展品は、全てが天産物であった。同略目では出展品を抄出する際に動物や鉱物を重視したようだが、海外産の動物や壺入りミイラといった奇品なども見られ、当時一般的だった博物化した「薬品会など」の典型的な特徴が見られる。

ここで注意する必要があるのは、出展品に同じ傾向の物が見られるとはいえ、博覧会は「薬品会など」の直接的な後継ではないということである。開催の主体、会に求めるものの違いから、本草学を継承した「薬品会など」は博覧会とは別の形で明治半ばまで継続して開かれていた<sup>21)</sup>点、本質的には違う要素を持つことを前提する必要があると思われるからである。

鋤雲が最初にイメージしたのがそのような展示であったことが、その後に出展品を集める際にも影響していたように思われる。expositionを薬品会と訳さず、博覧会という名称を造語したところに、単に

規模の大きさだけでなく、産業革命を背景とした工業製品や美術工芸品など人工物の出展に、それとは違う要素を感じていたことが想像できるからである。そして、日本からの展示品の選定に当たって幕府はロッシュの助言を受け、「陶器、漆器、金細工、銅器、甲冑、刀槍、浮世絵、名所絵図、和紙、材木、鉱物」などを出品した。

#### ■パリ万国博覧会出品の収集

幕府は、出展を決めた後から展示品の収集に当たったが、博覧会に「薬品会など」をイメージしていたとはいえ、パリで「薬品会など」を再現する意図ではなく、慶応2年には全国諸藩に出展品を募る規則書<sup>22)</sup>を出している。その中には「品物陸上之節、運上之無」、「品ものハ新規之物ニハ夫相限り、旧き品ニ而も不苦候間、可成丈新規宜敷品差出候事」、「品物ハ一種一品には不相限、数品差出候而も不苦候事」などの条があり、出展を促すための配慮が伺われる。

それだけではなく、幕府が予め出展に相応しいと考える品種を例示したりリスト『仏国博覧会え可差送品書』を添付しており、そこには先にロッシュから助言を受けたように、日常の品から漆器、工芸品、浮世絵などを中心に120種類余の品種を挙げている。その中で天産物類は「茸菌陰植物之類」「茶」「野菜もの」「水晶」「不二石」「紋石」「瑪瑙石」「其他堅石各種」「日本産之穀之各種」「獣角」「鳥之羽毛」「鼈甲」「薬草」などが挙がっていた。

この件は加賀藩寺社奉行を通して立山へも届いており、芦峯寺一山会文書<sup>23)</sup>にその記録が残る。但しそれを承けて実際に立山山域から出展品を差し出した記録は残っていない。

#### 大目付江

来卯年三月仏蘭西国都府<sup>「二」脱カ</sup>において、宇ノ内各州出産之物品を取聚め展観場ノ相開候二付、御国産物をも御差送有之候様ノ致度旨同国政府ノ申立御国地土産之ノ品々も差し遣候筈ニ候間、万石以上以下之領分知行土産之物品同所江差送り度望之ノ者

は其筋江可申立候、且百姓町人二而も／同様差出  
／度ものは御差許可相成候間是又其筋々江可申立  
候

右之通可被相届候

四月

同様の文面の写しは他国にも残っており、全国から展示品を集めようとした跡が見える<sup>24)</sup>。この時、パリ万国博覧会出展の実務には蕃書調所物産局の伊藤圭介、田中芳男らが関与していたが、田中はこの後明治政府でも大学南校物産局や澳国博覧会事務局でそれぞれの博覧会の出展準備に当たっている。

## 2-2. 明治4年「大学南校物産会」

明治4(1871)年5月に大学南校物産局が主催した「大学南校物産会」は明治政府が主導して開催した最初期の博覧会である。出展品は天産物が中心であり、他には西洋の器具類なども出展されていたが、それらは全体の一割程度に過ぎなかった。

出展目録の記載が、天産物を植物、動物、鉱物に分けて分類している点や出展者が出展物を並べた後に小さく付記している程度なのは、「薬品会など」での目録の記述と比べて、出展者よりも出展物に重点を置く意識の変化を感じさせる。

但し、出展された天産物を詳細に見ても、それ以前の「薬品会など」で見られた博物趣味的な天産物とは、名称も含めてほとんど違いがない。その理由としては、大学関係の出展者の大多数が、かつて尾張の博物サークル「嘗百社」の主力メンバーで、「薬品会など」をよく見知っていた伊藤圭介、田中芳男など幕末に本草学を学んだ者だったことが大きいだろう。大学南校が所有していた同種の岩石類や考古遺物や、それらの人々の個人コレクションが大部分を占めていたのだから<sup>25)</sup> 出展品が博物趣味的な近世本草学の枠を出ていないのは、むしろ当然のことであった。仮に出展者を広く募ったとしても、当時の人々にとってこの種の催事の認識は「薬品会な

ど」と大差のないものになったであろう。

唯一「薬品会など」との違いを見出せる前述の「西洋の器具類」には、明治以降に大学南校が教学用に輸入したマイクロスコープや太陽系旋回雛形(測量究理器機之部)、多数の人体内臓の模型などがあつた。

この時点での「薬品会など」との違いは、近世的な部分をそのままにしたところへ近代科学を輸入して継ぎ足した、暫定的な構成であつたという点であろう。ここに本草学と近代博物学との連続性、形態の混在がよく表れていたように思われる。

### ■「越中・立山産品」の出展

この時に出展された「越中・立山産品」は表4にある4点であつた。

表4 大学南校物産会出展の「越中・立山産品」

名称	採取地(特記)
瑪瑙	越中砺波郡大井川産
鋳イシ	越中立山産 (細キ石英ヲ束タル如キ石)
切子ズナ	越中七百沢相本橋辺産
地獄谷ノ麦	越中立山産(一種ノ禾本ナリ)

何れも近世本草学の博物コレクションによく見られた物である。瑪瑙は前述の通り「薬品会など」では頻繁に出展されており、砺波郡内は名産地となっていたようである。「鋳イシ」の名称は一般名ではないが、添え書きされた「細キ石英ヲ束タル如キ石」からは『雲根志』の「山姥鑿」<sup>26)</sup>に相当すると考えられる。「切子ズナ」も『雲根志』にある。「地獄谷ノ麦」は、『奇草小図』<sup>27)</sup>にある「立山麦」のスケッチにあるような、弥陀ヶ原餓鬼の田のミヤマホタルイが推定される。

## 2-3. 明治5年「湯島聖堂博覧会」

明治5(1872)年3月に湯島聖堂大成殿を会場として文部省博物局が開いた博覧会である。

出展物の特徴は、前年の大学南校物産会と比べ古器旧物の出展が圧倒的に多かったこと、出展された



天産物の中に動植物類は全く含まれていなかったことである。

その一方、本来は天産物ではないが外見の珍奇さから愛玩され、近世には岩石類や化石などと同類に括り、区別がはっきりしていなかった雷斧石、霹靂礎、石磐などの「神代石」は多数展示されている。このことには、近代以降これらが考古遺物、文化財として資料価値が区別される過程の先がけが感じられる。しかし、出展者は依然天産物とこれらを一まとめにして目録に記載しているの、文化財の意識が一般的であったとまでは言えないようである。

また、この会では「越中・立山産品」の出展は1点もなかった。

#### ■ウィーン万国博出展と常設博物館の連動

湯島聖堂での博覧会の後、文部省博物局では定期的に会場を公開する実績を重ね、常設博物館とする構想を同時に持っており、そのための展示品収集を澳国博覧会事務局と連携して進めた。

その際に天産物と古器旧物とは、別々な形で展示品の把握に着手したようである。前者では、各府県へ出展を命ずるために目録を作成してから天産物や手工業品、工芸品の収集を進めたのに対して、後者では寺社などに所蔵する文物の保存とその調査を各府県に命じ、報告を取りまとめていた<sup>28)</sup>。

明治5年の湯島聖堂博覧会での展示品が古器旧物中心だったことには、特に後者が背景にあったこと<sup>29)</sup>や、明治5年正月に各府県に命じたウィーン万国博のための展示品が、その時点ではまだ十分に集約されていなかった事情があった。また、この時出展対象としていた天産物は基本的に近世の「薬品会など」のものとは大差がなかったことが目録からも読み取れる<sup>30)</sup>。

ただ、天産物の出展数自体は少なかったが、出展者の数は前年の大学南校物産会に比べて増加している点に大きな変化がある。政府からの指示で各府県が収集しているものとは別に、事務局が天産物の出

展を呼びかけるなどした個人コレクションが多かったのではないかと推測される。

#### ■この時期に各地で開かれた博覧会

近世の「薬品会など」が天産物中心だったのに比べて、明治初期に各地で開かれた博覧会では、各地とも書画骨董を含めた見せ物的（興行的）印象を強く感じさせる。後に全国各地で開かれた博覧会は湯島聖堂博覧会での大盛況の影響や、見世物的な要素、西洋文明の知識を啓蒙する意味合いも持つ総合的な構成であった。

各地とも古美術品の出展が多いのは、全国的な宝物調査（壬申検査）が行われた直後だったことも無関係ではないだろう。地域的には京都や奈良などでは寺院からの宝物の出展が多いのも頷ける。各地での伝統的手工業品の扱い方で特産品や名物に地域的な特徴も見られる。また、開催地は旧城下町が多く、出展者はその地域内（同府県とその近隣、その地域が含まれる旧国内）からにはほぼ限られているなど、地域博覧会となっていたのも特徴と言える。

#### 2-4. 明治9年「富山展覧会」

明治9（1876）年には大法寺で富山展覧会が開かれた。それ以前に金沢では明治5年に金沢展覧会、明治7年に金沢博覧会が開かれた後、明治9年には兼六園内に金沢博物館を設置していた。富山展覧会では出展者の中に「金澤博物館備品」とする物が多数見られるので、資料の貸借などの運営に同館とのつながりがあったとも考えられる。

但し、金沢展覧会での「越中・立山産品」は、「立山産硫黄」1点のみであった。また天産物ではないが立山に関連して「古銅地藏尊像 立山室堂什器」（出展者：鹿熊屋喜右衛門）が出展されていたことには、明治維新直後の廃仏毀釈との関連が考えられるので付記しておく。また、明治7年の金沢博覧会では「越中・立山産品」の出展は見られなかった。

富山展覧会では、目録に産地を記載している出展品は一部だけで、ほとんどは出展者名を記載しただけである。恐らくこれは主催者にとって、会の運営上個々の産地情報よりも出展者・所有者の情報の方が、特に骨董や美術品などではコレクション顕彰の意味でも重要だったためと思われる。

出展内容では、立山の高山植物が数多くまとめて出展されていた点が大きな特徴である。地方で開かれた博覧会では地域の特色が現れるので、ここに立山産品出展が多かったのは自然なことだが、立山を見る視点は近世のままであり、出展の仕方も植物学的な分類ではなく高山植物の一覧、江戸時代からの園芸ブームの延長上にある陳列の形式であった。

一方、「八尾芋」、「猿芋総」などは、紡いで糸にする前の繊維植物の見本であろうが、生糸や織布な

どの展示は殖産興業の意識が伺われるものである。

「薬品会など」と比較して言えることは、展示品目は、[天産物][書画骨董][西洋舶来品]の枠組みがこの時代の博覧会での一般的な構成パターンだったということである。天産物では、植物・鉱物を資源材料と捉えた部分も見られるが、依然8割ほどの出展品が博物趣味的なものであり、近世の「薬品会など」が色濃く残る過渡期の地方開催博覧会の特徴と同様であった。

章末の表5は、明治9年の富山展覧会で出展された「越中・立山産品」を抄出したものである。「更紗模様大石」「笠石」などに近世弄石趣味が色濃く残り、形状・模様が珍奇岩石・化石類を同列に展示する形態であることも他所で開かれた博覧会と大差がないものであった。

表5 「富山展覧会（明治9年）」出展の「越中・立山産物」

名称	産地・備考	分類
硫黄	立山産 金沢硫黄組売品	Bう
八尾芋	八尾町産出品	Bい
石英	立山ノ奥薬師ヶ嶽産	Cう
猿芋総	立山産	Bい
六角石	立山産	Cう
烏帽子石	神通川ノ産	Cう
鉱山石	同(神通川)産	Cう
禅定松	立山産	Cい
岩銀杏		Cい
荏		Cい
菘連菜		Cい
蔓金梅		Cい
ツガサクラ		Cい
車葉百合		Cい
紅花風露		Cい
紅花馬先蒿		Cい
燕フモト		Cい
黄花董		Cい
峠柴		Cい
白花柴菜		Cい
黒百合		Cい
柳葉菜		Cい
紅花大文字草		Cい
八重金梅草		Cい

名称	産地・備考	分類
アルセム		Cい
添姑草		Cい
紫花石龍膽		Cい
丁字菊		Cい
中禅子菜		Cい
岩梨		Cい
高良蒿		Cい
黄花劉寄奴草		Cい
紅花紫菜		Cい
細葉菅		Cい
ハイケイ草		Cい
金梅草		Cい
白花人參		Cい
銀梅草		Cい
紅花虎杖	立山産	Cい
蚤休		Cい
一葉狼牙		Cい
続断		Cい
紅花虎耳		Cい
立山焦黄石		Cい
飯石	五ヶ山産	Cう
銀含石	ホコラ谷産	B(C)う
銀盤石	五ヶ山産	Cう
銀含石	銅ヶ平谷産	B(C)う

名称	産地・備考	分類
御前橋		Cい
梅鉢草		Cい
紫花一輪沙参		Cい
白花龍膽		Cい
白馬先蒿		Cい
麗春草		Cい
紅ハ、コ		Cい
烏頭		Cい
地榆白ハ、コ		Cい
草津升麻		A(C)う

名称	産地・備考	分類
青銅石	銅平谷産	B(C)う
鉛石	亀谷新馭谷産	Bう
泥炭石	眼目谷産	Bう
馬葉石	五ヶ奥山産	Cう
立山小水晶石		Cう
黒六方石	立山産	Cう
更紗模様大石	常願寺川産	Cう
トクサ	有峰村産品	Cい
笠石	砺波郡田川山中	Cえ

凡例 ・採集地は、史料にあるままの表記  
 ・分類は、A：薬種、B：産物として流通するもの。C：A、B以外の博物的な趣味による品物  
 あ：動物類、い：植物類、う：鉱物・岩石、え：化石・考古遺物類

### 3. 明治6年のウィーン万国博に出展された「越中・立山産品」

明治政府は、オーストリア政府からの公式参加要請を受け太政官正院に博覧会事務局を設置し、町田久成、田中芳男らを博覧会事務局御用掛に任命して準備を開始した。

ウィーン万国博での出展物は、ドイツ人のお雇い外国人ワグネルの指導で、西洋を模倣した機械製品よりも日本的で精巧な美術工芸品中心の出展とし、日本文化を西洋に紹介するための美術工芸品や軽工業製品が大多数であった。そのため全国から優れた工芸品を買い上げたほか、展示後に現地での売却が計画されていたので、事務局が東京で商人から購入した物も多かった。

それとともに、東京では入手が難しい各地の特産品、天産物を各府県を通して数多く収集していた。現在から見れば、万国博覧会は工業技術革新のデモンストレーションといったイメージが強いが、この時代、国土の豊かさを誇る天産物出展の役割は決して小さくはなかったようである。

#### 3-1. 各府県を通しての出展品収集の過程

博覧会出展物の収集に際しては、開催前年正月に

太政官から各府県に対して太政官布告が出された。

明治五年申年正月 太政官第七号（澳国博覧会出品手続）

○第七号（正月十四日）澳国維納府ニ於テ来西年中博覧会有之 御国ニ於テモ此会ニ被列候ニ付各地方物品差出方等右事務取扱御用掛ヨリ時々指揮ニ及候條其旨相心得事 但委細之儀別紙書面之趣参考可致事

上の史料に見える「別紙書面」は博覧会事務局が出したものである。そこには、

来西澳地維納府ニ於テ博覧会ヲ催シ同年四月開場同八月終局相成凡ソ同盟各国ニ於テモ此会ニ加入シ其国ノ天産人造品トモ差出シ學術工芸進歩理世經濟ノ要旨ヲ著シ人生相互交易資溢スル通義ヲ拡メテ益利用厚生ノ道ヲ尽スヲ主トス（中略）是ヲ以テ天産物ノ豊饒ナルハ其国土壤風氣ノ好キヲ著スヘク

（以下略）

とある。天産物出展の意図を「天産物ノ豊饒ナルハ其国土壤風氣ノ好キヲ著ス」としている点に注目すれば、出展品の価値は近世本草学同様の博物的な珍

品というよりも、「国土の豊饒さを示す資源」とする物産学的な考え方が強い。しかし、当初作られた収集予定品のリストや結果的に東京に集まった品物を見ると多分に近世的で、必ずしもそうとは言い切れないものがあり、ここにも過渡期の一面が表れているようである。

続けて、同年2月には博覧会事務局から布告文が出された。

#### 澳地利国博覧会

来ル酉年澳地利国於而博覧会を催し御国よりも諸物品被差出候ニ付商人共申合御国産差出候義は願/次第御許容可相成若又官より可差出品物一同差送方/相願候者ハ其品柄ニ寄り事務局ニ而預り證書と引替/運送の入費ハ一切官ニ而給せられ差送可申事

(以下略)

この文面は商人などにも宛てられ、各府県を通して公的に収集する以外に広く直接出展を要請していたことがわかるものである。費用の公負担や、希望者には出展を差し許すという姿勢は、慶応3年のパリ万国博の際の手法を踏襲しているようである。

### 3-2. 出展予定品の決定

慶応2年の幕府によるパリ万国博出展品収集の際には、世話懸が「仏国博覧会え可差送品書」を出し出展に相応しい種類を例示していたが、ウィーン万国博ではさらに詳細な方法がとられた。

まず博覧会事務局では、予め出展できそうな各地の特産物を書き上げた目録を作成し、それを添えて各府県へ収集を命じた。加えてそれだけでは十分に意図が伝わらないことを懸念して、必要に応じて博覧会事務局の職員を現地へ派遣し実際に指導するというものであった。収集に当っては、各府県からは目録所載の特産物を2品ずつ提出させ1点はウィーンへ、もう1点は東京の常設する博物館で展示することも計画されていた<sup>30)</sup>。この一連の収集活動から

は、その後の産業や教育の振興政策のための情報収集を兼ね幅広く天産物を収集しようとした意図が読み取れる。

#### 3-2-1. 出展を予定する品物の目録作成

東京国立博物館には、この時に作られたと見られる目録『諸国物産大略』(以下、「大略」と)と『五畿八道産物記』の2種<sup>31)</sup>が現存する。ともに、全国各地に産出する特産品のリストで、内容は全く同じだが「大略」には文部省の用箋が用いられ、『五畿八道産物記』には博覧会事務局の用箋が用いられている点に違いがある。編集の後先や模写関係などを示す記載がないので詳細は不明だが、二種の写本が作られていたことから、各府県から2点ずつ集めたことに伴う処理を2つの組織がそれぞれに進めていたことが伺われる。

#### ■この目録の特徴

実際には廃藩置県後に各地を所管する府県に収集を指示しているが、この目録は旧国ごとに分けて記載されている。廃藩置県で行政組織は新しくなったが、府県内で実務に当たる下部組織に対してその方が好都合であったことや、編集で参照した文献などが江戸時代に作られたものであったために、府県の分類が難しかったなどが要因として考えられる。

「大略」では旧国名ごとに産物名と産地名を列記した書式に、「○○国産物大略」と題を付けてまとめられた国と、単に国名を記した後に産物名と産地名を列記している国とが分けられていた。博覧会事務局では必要に応じて職員を現地へ派遣し実際に指導する体制をとっていたことは前述したが、それと同時に、産物的に重要で量的に多くの収集活動の必要性があるところとそうでないところは、予め把握した情報によって地域ごとに軽重をつけていたためではないかとも思われる。

国名が入る形式で作られた目録が残るものには「北海道」「尾張」「肥後」「美濃」「信濃」「安房」「摂津」「伊予」「備後」などがある。越中も含めて

その他の多くは国名があるだけである。

### ■この目録の内容

「大略」に挙げた産物は、近世的な資料に依拠した部分を多く残しており、後に実際に東京へ集められた品物をまとめた『澳国博覧会出品目録』<sup>39</sup>と比較しても大きな差が見られるものであった。

「大略」に挙げられた産物名は非常に近世本草学の色が濃い。博覧会事務局では、本草学を学んだ人材、さらに詳しく見ると尾張本草学を修めた伊藤圭介や田中芳男、そして京都本草学の中心になった山本読書室の山本章夫らが「大略」の作成に関与しており、彼らは何れも十分に「薬品会など」開催の経験を持っていた。そして元になった資料は、『雲根志』や『採薬記』、「薬品会など」の目録など、当時の産物と産地に関する情報が盛り込まれた多数の本草書や各地の産物、名産品に関する書物<sup>40</sup>であったと考えられる。恐らくその他に、当時まだ残っていたであろう本草家たちによる近世からの博物的サークルのネットワークを通じた博物的コレクション情報なども活用されたと推定される。

これらの諸事情から、「大略」記載の天産物には旧記に依った、必ずしも時代に合わない産物も含まれていたことはやむを得ない。

しかし事務局では、ウィーン万国博に先行する明治4年の大学南校物産会や明治5年の湯島博覧会を経ていることから、この点はある程度承知していたと思われる。

「大略」と共に添付された注意書きには、

右二挙ルノ外金石土砂草木鳥獸魚介虫類并製造諸品且珍奇ノ品ハ必二品ツ、差出スヘシ

(中略)

右鉱物、植物、動物、并製造物トモ必其物ノ産地并用法ヲ書添差出ス可シ総テ至テ得難キ品ノ外ハ何品ヲ論セス必二品ツ、差出ス可ク又小ナルモノハ数多キヲトス

とある点に、「大略」には挙げていない物であっ

ても珍奇な物はなるべくたくさん出展するように促していたと見えるからである。博覧会への出展は殖産興業推進のための資源把握も意図されていたと考えられるので、「大略」に記載された品物は、厳密な提出品の指定ではなく、改めて実態に即した情報や産物を集めるための例示、いわば「叩き台」として示されたものだったと考えられる。

### ■「大略」にある越中国産品

新川県に渡された「大略」記載の越中国産物は、章末の表6の通りである。

挙げられた産物名からは『雲根志』や『兼葭堂日本石譜』、『採薬記』、当時の「薬品会など」の目録などのほか、正確な出典の記載はないが、準備に当たっていた博覧会事務局の職員に山本章夫らが加わっていることを考えると、京都山本読書室物産会関連の目録などの資料も参照された可能性が考えられる。

記載を個々に見ると、表中の「硫黄」、「水晶」については五箇山、立山産のものが、「消石」も五箇山産のもの、「黄連」は二上山産・立山産のものがいずれも山本読書室に所蔵されていた。また、「瑪瑙」は城端産のものの記述が『雲根志』ある。「介石」も『雲根志』にあるが、「大略」に「廣嶋」とあるのは作成の際の誤記で、本来は「唐島」<sup>41</sup>である。「化石」は『雲根志』の記載では産地を「伊奈川」を誤記している点まで同様であることから、『雲根志』から引用した可能性が高い。

「玳瑁」は徳光産とするものが『読書室物産会目録』にあるが、本来は越中産ではない。誤記をそのまま引用している点からこの記述は『読書室物産会目録』が出典の可能性が高い。

「鼓」は『雲根志』と『兼葭堂日本石譜』に「鼓石」の記載があるが、石そのものよりも鼓の如く鳴るといふ伝承に価値を置く点で弄石趣味に属する。「鍾乳石」も石筍などの形の面白さから近世の「薬品会など」には頻繁に出展されていた産物である。

越中以外の国の記述についても、「大略」作成の

際にはそれぞれの地域の特産を示す文献が参照されたのであろう。長野県や筑摩県に示された『信濃国産物大略』については個別に先行研究があり、越中国同様に『雲根志』を挙げる他、信濃の本草学者に関する産物誌などを出典に挙げている<sup>36)</sup>。

#### ■『澳国博覧会出品目録』の記述

新川県からは4回に分けて出展品が東京に送られた。大部分は明治5年6月28日に東京へ送られた後、11月8日には「鉾石」（新川郡亀谷村領山産出）と、「沙硫黄」（同郡有峰村領山産出）の2点を追加発送している。（章末の表7「『澳国博覧会出品目録』所載の越中・立山産品」参照）

事務局での出展品集約の目途が6月30日だったので、それに間に合うように送った後、敢えて11月8日にそれらを追送しているのは、事務局からの新たな要請があったからと考えられる。実際にウィーンに送られた展示品に越中産の「硫黄」と「輝鉛鉾」が含まれていたため、ウィーンでの展示を前提に追送させた可能性も考えられる。

また越中からは天産物以外では高岡銅器が出展されており、明治5年11月28日には「八島合戦義経八艘飛図」「源三位頼政射鶴図」の花瓶各1対が、翌明治6年3月5日には「大江山酒顛童子図」の大花瓶1対が東京の博覧会事務局へ送られている。

但し、出展するための品物がウィーンへ向けて船便で発送されたのが明治6年1月30日だった<sup>37)</sup>ので、新川県からの博覧会事務局へ送られたのが明治6年3月5日とあるのは、わざわざウィーンへ追送したことになる。高岡銅器の花瓶は、博覧会事務局からの指示により特別に製作されたものだが、結局ウィーン万国博で出展されたのは、この3月5日に送られた花瓶だけだったので、その完成を待っての追送だったことがわかる。

新川県から東京の澳国博覧会事務局へ出展品を発送した際の、県側の記録が『旧新川県誌稿』<sup>38)</sup>である。明らかに「大略」で示されたものよりも種類が

多い。前述の添付注意書きには、珍物があれば送るように指示されているが、その判断が各府県に任せられていたのか否かは不明である。ただ博覧会に限らず博物館での展示を含めて考えれば、数が多すぎるからといって不都合はないわけであり、府県ではさらに下級行政単位に指示を出し、合致する品物を集めたと思われる。

次に「大略」に記載された具体的な産物について3点から比較してみる。（表10「ウィーン万国博・第一回国内勸業博覧会関連の「越中・立山産物」と記載目録」参照）

#### (1) 産地が違うもの

- ・「緑青 緑青山」とあるが、この地名での産地は特定できなかった。博覧会事務局へ発送された品物は千垣産となっているが、これも産地は特定できず詳細は不明である。
- ・「石炭 井波雄神山」は、雄神山は旧井波町から旧庄川町にかけての場所を指すと思われるが詳細は不明で、当該地域にはそれに当たるものがない。『雲根志』には「越中立山」が石炭の産地に挙げられており、ここは誤記の可能性が高いものである。実際には越中国内に大規模な炭田は存在しなかったが、立山山域を含め越中国内各地から産出する石炭類を取りまとめて発送したのと考えられる。
- ・「鉄沙 伏木濱」は、発送された物には東岩瀬産とある。産地はかつての本草書から引き写された際の誤記の可能性が高い。東岩瀬産の砂鉄はこの後資源として分析されている。

#### (2) 「大略」に記載がないが、新川県から博覧会事務局へ送られたもの

- ・「青土」・「朱石」・「磨沙」・「ゲン石」は、江戸時代から知られた「瑪瑙」以外に砺波地方で産出する様々な鉾石、宝石類をまとめているものであろう。
- ・「切子砂」は『雲根志』に越中立山産の記載があ

るが、舟見村（現入善町）産として知られていた。

- ・「肉シシ」には羚羊が当てられているが、羚羊の皮が、加工用の皮革として扱われていたと考えられる。
- ・「真綿」・「呉郎丸布」は何れも繊維素材で、養蚕や麻布の生産と連動しているものである。「呉郎丸布」は藩政時代から砺波地方で特産の麻で、名産物として地元から収集されたものであろう。

### (3) 「大略」にはあるが、博覧会事務局へは送られなかったもの

存在そのものが不確実なものや、明治の時点で産物としての価値が怪しかったもの、明らかな弄石趣味の珍品が含まれている。

- ・「石膏」は「大略」には産地立山とするが、当該する鉱物の産出は他の文献資料には記載がない。
- ・「玳瑁」は県外産の誤記による。
- ・「鍾乳石」・「鼓」は、何れも弄石家が珍重する類のもので、近世の資料を元に「大略」を作成していたところから加えられたようである。
- ・「介石」は貝化石を指すが、各地で産出するものを近世の弄石家が珍重していたものである。

産地の誤記は、全国的な作業の中では避けられないことと思うが、天産物を資源として扱うものと、博物趣味の延長上にあるものとが混在する記述が、この時点での天産物の認識を示すものとして特徴的である。

### 3-3. 実際にウィーン万国博で展示された産品

集約は明治5年11月に完了した。しかし、集められた産物は全てウィーンへ持って行った訳ではなく、ここからさらに選別して最終的な出展品を決定し現地へ送られた。その際の出展目録はドイツ語に翻訳して作成された。

その作業の中心になったのは、やはり田中芳男だったようで、単にウィーンへ送るかどうかの判断だけ

ではなく、この後常設の博物館で展示することも視野に入れて作業を行った跡が残されている<sup>39)</sup>。

そして、ドイツ語に翻訳された最終的な出展品目録である『CATALOG der Kaiserlich Japanischen Ausstellung wien 1873』<sup>40)</sup>の記載から「越中・立山産品」と確認できたのは「鉛(Blei)」、「輝鉛鉱(Galenite [Bleiblanz])」2種、「赤鉄鉱(Rotheisenerz [Hamatit])」、「硫黄(Schwefel)」、「瑪瑙(Achat)」、「朱石(碧玉・Jaspis)」の計6種7点のみであった。

越中から東京の博覧会事務局へ送られた30種余りの産物の中からこれらが選ばれた理由は様々に考えられるが、特にこれら7点の何れもが単独で出展されていなかったことは重要であろう。

「鉛」は越後産、日向産と共に計3点。「輝鉛鉱」は備前産、磐城産、陸奥産、陸前産、新潟産、武蔵産と共に越中産は2種の計8点。「赤鉄鉱」は越前産と共に計2点。「硫黄」は豊後産、信濃産2種、肥後産、陸奥産、越前産、下野産、羽前産2種、大隅産、陸中産、岩代産と並んで計13点。「瑪瑙」は美濃産、阿波産、信濃産、佐渡産、伊勢産、越前産と並んで7点、碧玉は薩摩産、佐渡産と並んで計3点が目録に列記されている。

このことは、鉱石を珍品として色形の善し悪しを表すだけでなく、国内での産地の違いによる質の違いに注目していたことの表れと考えられる。ウィーン万国博に出展された鉱物には出品後オーストリアの研究者に研究を依頼したものもあったからである。また博物館に収蔵した標本、つまり、集めた後万国博へは出展しなかった鉱物は東京で和田維四郎に命じて研究させることになっていた<sup>41)</sup>。これも出展品を選ぶ際に重要な視点となったのであろう。

その他にウィーン万国博に関連して作られた目録で、産地名に加えて産物の対価や年間産出量を詳細に記録しているのが『府県物産志』である。(表8「『府県物産志』巻四 所載の越中・立山産品」参照。)

これは博覧会終了後の明治8年に作られ、博覧会事務局の用箋に清書し府県ごとにまとめ、産物は〔鉱物〕〔植物〕〔動物〕〔製造物〕に区分している。

「越中・立山産品」の記載は『澳国博覧会出品目録』や『旧新川県誌稿』ほとんど変わらない内容である。収集に関する一連の作業について、博覧会事務局と文部省産物局は共同して仕事を進めていたわけだが、これは、それぞれの仕事を進める上で必要な情報の違いなどから、同じ産物に対しても記載事項が異なる資料が何種類も作られたことの跡と考える。

記載を比べて、『澳国博覧会出品目録』になく

『府県物産志』にあるものには「五箇山産硝石」「木葉石」「タンサタキ」があった。「硝石」は藩政時代から五箇山の産物として流通してその品質も定評があった産物だが、明治以降に海外から安価な硝石が輸入されると、急速に生産量が落ち商品価値が低下していったことが、万国博には出展されなかったことと関係があるようにも思われる。

「木葉石」は川水に含まれる炭酸カルシウムが付着した落ち葉で、「薬品会など」にもよく出展されていた弄石家のコレクションだが、どのような経緯で『府県物産志』に記載されたのかは不詳である。「タンサタキ」に当たる産物も詳細はわからない。

表6 『諸国産物大略』『五畿八道産物記』所載の越中・立山産品

品名	産出場所	備考
鉛	亀谷、井波雄神山	『五畿八道産物記』には「井波雄神山」の記載なし
緑青	緑青山	産物、産地ともに未詳
硫黄	立山	立山産のものは読書室物産会に出展
水晶	立山	立山産のものは読書室物産会に出展
鉄沙	伏木濱	
消石	五ヶ山	五箇山産のものは読書室物産会に出展
石炭	井波雄神山	
瑪瑙	井波雄神山 城端	『雲根志』
鍾乳石	伊波村	
石膏	立山	
介石	廣嶋	『雲根志』「廣嶋」は「唐島」の誤記
化石	伊奈川	伊奈川は越中ではない。『雲根志』にも同じ誤記あり。
黄連		二上山産・立山産のものは読書室物産会に出展
熊膽		
玳瑁	徳光浦	徳光産のものは読書室物産会に出展
半紙		
八講布		
鼓	砥波郡林道寺村	『雲根志』、『兼葭堂日本石譜』に同所産「鼓石」の記載あり
カタクリ麴		



表7 『澳国博覧会出品目録』所載の越中・立山産品  
 新川県 六月廿八日着 第十四号

品名	産出場所
緑青砂	同郡千垣村
硫黄	新川郡立山
六方石・白石英	同郡立山
鉄沙	同郡東岩瀬村
石炭	婦負郡深道村
同	同郡鍋谷村
同	同郡下笹原村
瑪瑙	礪波郡才川七村
化石	礪波郡東原村
黄連	砺波郡医王山
生黄連	同産
熊膽	新川郡立山
半紙	礪波郡
同	婦負郡野積谷村
八講布	礪波郡
呉郎丸布	同郡福光村
カタクリ粉	新川郡境村
朱石	礪波郡才川七村
磨沙	同郡埴生村
ゲン石	同郡五ヶ山小原村産自然銅
切子沙	新川郡舟見山 石柘榴一種
真綿	礪波郡井波町
肉シ、皮	同郡五ヶ山産羚羊

同十一月八日着

品名	産出場所
鋳石	新川郡龜谷村領山
沙硫黄	同郡有峰村領山

十一月二十八日着

花瓶	越中国射水郡高岡町製 八島合戦義経八艘飛図
花瓶	同所製 源三位頼政射鶴図

同癸酉三月五日

大花瓶	同所製 大江山酒顔童子図
-----	--------------

表8 『府県物産志』巻四 所載の越中・立山産品

新川県 管轄越中三郡(新川 婦負 礪波) 植物 動物 製造物

品名	産地
鑛物	新川郡長棟村(※有峰付近) 龜谷村領山産 五ヶ山 田向村 稲村 有峰村等
鉛	長棟村産
鉄沙	同郡東岩瀬村産
鑛鉄	加賀沢村産(※細入村楡原付近)
硫黄	同郡立山産 又同郡有峰村領山産 一ヶ年製出凡五万四阡斤
白石英	同所産
タンサタキ	加賀沢村/葉石灰礦
石炭	婦負郡深道 同郡鍋谷字赤松 同郡下笹原村字北江和産
瑪瑙	礪波郡大西村才川七村産 大西村一ヶ年産出七十貫目計 代価三百八十四円十三錢四厘許
朱石	同(礪波)郡才川七村等産
青石	同(礪波)郡井波山産
緑青沙	新川郡千垣村字管谷産
消石	礪波郡五ヶ山産/一ヶ年製出二万斤 代価一斤十八錢三輪ヨリ二十一錢六厘迄
化石	同(礪波)郡東原村産
木葉石	同所字赤祖父谷産
磨砂	同(礪波)郡埴生村領山字横引産
ゲン石	自然銅 同(礪波)郡五ヶ山小原村産
切子石	石柘榴一種 新川郡舟見村字柘岩産
黄連	礪波郡医王山産

品名	産地
肉シハ	羚羊 礪波郡五ヶ山産
熊膽	新川郡立山産
真綿	礪波郡井波外四ヶ村製／一ヶ年製出三百三十貫目 代価百貫目二付六十五錢九厘
鳥子紙	外十三品一ヶ年製出一凡平均一円五十錢
半紙	礪波郡五ヶ山婦負郡野積谷村外村ノ製／礪波郡一ヶ年製出九千枚 代価一凡上品一円五十錢二厘下品一円六錢／婦負郡一ヶ年製出凡六千枚 一凡二千枚 代価上品一年二十七錢五厘下品一凡一円迄
八講布	礪波郡三十四ヶ村村々産／一ヶ年製出三千疋許 代価一疋一円二十五錢ヨリ一円五十錢迄
呉郎丸布	同(礪波)郡福光村外六十七ヶ村産／一ヶ年製出二万疋許 代価一疋一円二十五錢ヨリ二円五十五錢迄
カタクリ粉	新川郡境村産／一ヶ年製出凡二石許 代価一升四貫三百文
※当時七尾県が管轄した越中射水郡の産物(製造物)	
銅器	越中射水郡高岡製 代価花瓶一對五十円／大花瓶一對四千百円 但酒顛童子退治ノ図

#### 4. 近世本草学的視点の衰退

##### 4-1. 殖産興業と内国博覧会の開催

この後、欧米で開催された万国博覧会への出展では、欧米の産業技術と交流を図るとともに日本の伝統文化紹介の方に力が注がれていく。

この、博覧会の産業技術交流のための役割は、国内では内国勸業博覧会の開催にはっきりと表れている。同博覧会は東京で上野公園を会場に明治10(1877)年に第1回が開かれた後、明治36(1903)年までに東京で3回の他大阪と京都で各1回の計5回が開かれた。

これがそれ以前の博覧会と違うのは、産業の育成や技術の発展に主眼が置かれ、珍品天産物や骨董などの出展を排除していたことである。全国からの出展品は天産物、人工物の他、絵画や彫刻、工芸品など6部門(鉱業及び冶金術、製造物、美術、機械、農業、園芸)に分類されていた。そしてこの博覧会は品評会、技術産業展覧会でもあり、出展品を審査し、優秀作には賞牌・褒状等が授与された。国内の物産とその産地の把握、産業の奨励を同時に行うイベントであり、この時点で「薬品会など」とは出展物とその展示の価値観に違いがはっきりしてくる。

内国勸業博覧会では天産物に対する見方は「薬品会など」の頃とは一線を画し、博物学の列品を止め、展示区分が細分化されただけでなく動植物・鉱物の分類や分析により専門性の高い視点へと転換されていた。

例えば、「薬品会など」では外見の珍奇さや不可思議さ、来歴に謂われのある動植物、考古遺物、化石宝石、薬草、鉱石なども混在して展示し、作られた目録は出展者ごとに展示品を記載していた。それに対して明治以降の博覧会では、形状や出所に珍奇を求めた品物、正体不明だが好奇心をそそる見世物品が先ず消えていく。そして近代科学が普及すると展示のカテゴリーは体系化されて「出展者」は所蔵を示す副次的な情報として扱われるものになった。このことで、展示物は出展者に属するのではなく展示のカテゴリーに属するものに位置づけられたわけである。

ここから見えてくる近代博物学と近世本草学との差異は、アマチュアリズム部分を切り離し天産物を資源、また教材や標本として見る専門性の高まりであった。このような展示品の価値観の変化が過渡期

の実際の姿だったと見る。

そして、内国勸業博覧会は産業技術の振興に特化したことによって、近世本草学や初期の博覧会に見られた、「古器旧物を一緒にした雑多な構成が普通だった過渡期の博覧会の諸相」は、失われていった<sup>42)</sup>。但し、同博覧会が品評会の側面を有していたことで、出展品に対する出展者との結び付きの重要性は失われたわけではない。

「薬品会など」から博覧会への展示品の質的な違いはまた、明治維新後10年ほどの近代教育体制の整備とも呼応する。明治になって新たに高等教育機関が整備されると、そこで天産物を網羅する総合的な研究のために植物・動物・鉱物それぞれに精度の高い試料、標本データが必要とされる。近世本草学による情報では、天産物は外見の特徴的な物のみを対象とした断片的で恣意的な収集だったため、その要求を満たすことが難しかった。これに対し、分類と分析を基本とする西洋から導入された近代科学では網羅的に標本の収集を行い、そこから特徴を発見する手法をとった研究を進めていった<sup>43)</sup>。この差に近世本草学の手法的限界が見えるようだが、これは「薬品会など」と近代博覧会の出展品の差にもあてはまるものがあるだろう。

#### 4-2. 鉱物資源の調査

明治6年には東京に開成学校が開学した。そこでは近代科学として鉱物学が導入されて、全国的な鉱物調査をもとに、殖産興業を進める上で天産物の資源的な価値を重視する専門的な研究が行われた。

岩石類は本草学でも生薬（石薬）や、弄石コレクションに扱われてきたが、鉱物学では岩石標本として、形状や色などの優劣による価値ではなく、有用鉱物としての価値が研究対象と見なされた。

文部省では明治7、8年に調査のため各府県から鉱物を集め、翌明治9年にその鑑定結果を『各府県金石試験記』<sup>44)</sup>として刊行した。これが、日本最初

の公式な有用鉱物の鉱物誌であった。

この時、新川県から集められたものは、「硫黄」（越中国新川郡立山字湯原谷字地獄谷）、「瑪瑙石」（越中国礪波郡荒木村並吉江新村領字坂尻）、「瑪瑙石」（越中国礪波郡大西村字是ヶ谷）の3点であった。何れも近世本草学で知られていたものだが、ここでは他の鉱物資源と同様に品質を調査の対象としている。

同書に記載する、各府県から集められた試料の多さは、鉱物の種類だけではなく採集された産地の多さでもあった。例えば「石炭」は、後に炭鉱として大規模に開発される磐城や肥前、肥後の他全国200箇所以上から試料が集められているし、「砂鉄」「銅鉱」についてもそれぞれ100箇所を越える産地から試料が集められていることなどである。結果から見ると調査は、品質や埋蔵量を含め、開発を視野に入れた全国的な調査プロジェクトだったことが伺える。

また、明治13年に博物局が作成した『博物館列品目録 天産部第三 鉱物類』では、試料の成分を分析した専門的な分類がなされている。例えば、収集された際にはリストに「石炭」と一括して記載してあった物がこの目録では無煙炭、石炭、褐炭、泥炭と分類されているなどである。

この目録に記載された「越中・立山産品」は表9の通りである。

表9 『博物館列品目録』所載の越中・立山の鉱物

品名	産出場所
石炭	越中新川郡長倉村字塔ノ倉 越中射水郡磯部村
泥炭	越中婦負郡下笹原村 越中婦負郡鍋谷村字赤松 越中婦負郡深道村
硫黄	越中新川郡立山湯原谷
輝鉛鉱	越中新川郡龜谷村
斑銅鉱	越中新川郡稲村
鉄砂	越中新川郡東岩瀬村
酸化マンガン	越中新川郡有峯村
柘榴石	越中新川郡舟見村字柘岩
水晶	越中新川郡立山
鉄珪石	越中栃羽郡才川七村

品名	産出場所
瑪瑙	越中栃羽郡大西村 越中栃羽郡布志名村及び面白村
陶土粘土	越中瀬戸村字ヨシ谷 越中新川郡千垣村字菅谷
寒水石	越中新川郡加賀沢村
煙硝	越中栃波郡字五ヶ山

この中にはウィーン万国博のために集められ、ウィーンで展示や分析に供された後日本へ持ち帰られたものも含まれている。「越中・立山産品」で言えば、『CATALOG der Kaiserlich Japanischen Ausstellung wien 1873』での記載と重複する「輝鉛鉱」「硫黄」「瑪瑙」「朱石（鉄珪石）」がそれに当たると見られる。

ここから読み取れるのは、越中国（新川県）からも産出する鉱物が広く集められた事実の他、越中国内での石炭や泥炭などの産出、中世以来の亀谷銀山、長棟鉛山の確認、そして瑪瑙や硫黄などを資源として把握と試料の分析がなされていたことである。

鉱物資源の調査をもとに実際に商業生産を行うためには、埋蔵量や品質が重要となるが、この目録にある鉱物の多くは産地の確認に止まっていたようである。ただ「越中国中新川郡長倉村」の石炭については、その付近の石臼平、志鷹谷奥部で昭和初期から、おそらく戦時の燃料増産のための炭坑が開かれ、戦前まで小規模な石炭生産が行われた。これは、明

治初期の調査が生かされた一例と見ることもできるだろう。但し生産された石炭の品質は低かったため、地元では最上質の「無煙炭」の語呂に引っかけて「燃えん炭」と揶揄されたと伝えられる<sup>45)</sup>。

明治10(1877)年の内国勸業博覧会では、旧越中国（石川県が所管）からの出品の中で天産物は全体の4分の1程度になり、技術的に高度な伝統工芸品や名産の繊維製品や食品、陶器や木工品などの軽工業品が多くなる。博覧会が品評会であるとともに商品見本市の役割も果たしていたのだから、各地から商品価値がある製品が多数出展されていた。（表10「ウィーン万国博・第一回内国勸業博覧会関連の「越中・立山産物」と記載目録」参照）

天産物では、以前から出展されていた鉱物資源類の他にこの時には、黒蘆の「温泉」、小川温泉の「凝花」などともに、立山産「猪胆」が出展されている<sup>46)</sup>。博物趣味的なものは姿を消し勸業博覧会の性格上、新たな資源的産品が出展されたことがわかる。内国勸業博覧会は、このあと明治36(1903)年まで5回開催され、その内容に見世物的な要素が強くなっていったことが指摘される<sup>47)</sup>が、それは博覧会が近世本草学の「薬品会など」に回帰したものではなく、近代文化の啓蒙と普及のための政策推進の手段としてのことと考えられる。

## おわりに

小論では、近世から近代への過渡期に開かれた博覧会での天産物に対する価値観の諸相を、立山及び越中産天産物を例に管見してきた。

立山自体は決して薬草の宝庫とか資源豊富な山として古くから知られてきたものではなく、少なくとも近世中期までは硫黄や熊胆などごく限られた産物を除いて、地元以外にはほとんど知られていなかったようである。宝石や火打石として使われた瑪瑙や、

火薬に使う焰硝は、加賀藩が生産や品質を管理していたものだが、これらは特産品として流通していたことで、江戸時代から広く知られていたものである。しかし、江戸中期以降にまとまった調査や物産開発が進められると、産出する薬種や産物の情報も流れていった。

だがそれ以上に、近世後期には立山山域は本草家の好奇心による調査登山の結果、彼らを通して博物

の山と見なされ、「薬品会など」の目録でも記載が散見される。

そして近代になると、博覧会への出展や博物館の設置を通して、近代博物学や物産学の視点から天産物の資源価値が重視されるようになっていった。立山でも資源の調査が行われ、資源価値を持った立山の天産物が、数は多くないが世に知られていくわけである。

ここで総括すると、天産物に対する近代科学の視点とは、専門的研究と殖産興業、輸出振興の求めに対応し、近世本草学の隆盛を支えた博物的アマチュアリズムの価値観を切り離すことであったと見ることができよう。

とは言え、日本の近世本草学と近代科学が断絶していた訳ではない。初期にその橋渡しとなったのは近世に博物的な本草学を修めた人材と、実証的な「薬品会など」の開催の経験だった点は理解しておく必要がある。

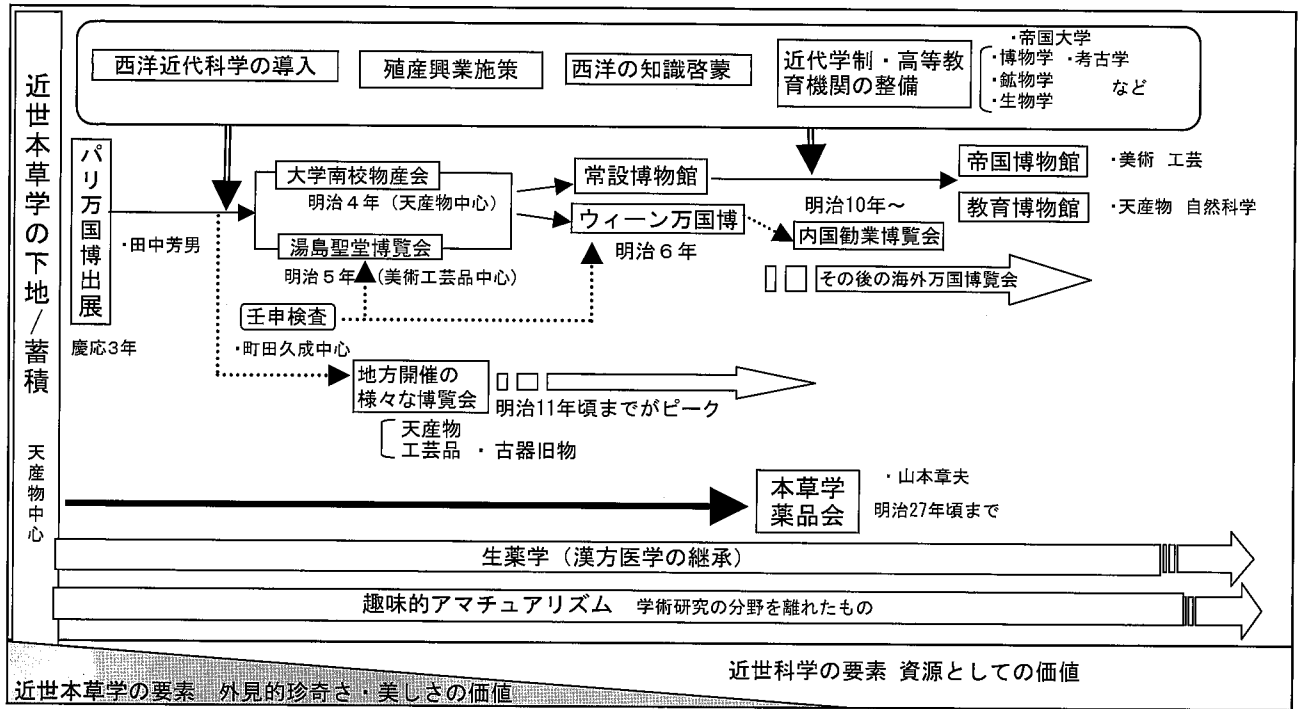
幕末から明治中期までの近世本草学から近代博物学への過渡期に専門性の高い研究分野に分化していった学問的な流れと、それを具体的な形でリードしていったイベントや施設などの整備の流れをまとめたものが章末の図1「明治初期の「薬品会など」・博覧会等の過渡期モードモデル」である。維新後の新政府にとって、大学や博物館などの施設を整備して近代西洋文明を普及させ、学問の専門性を高めることは急務であった。そのために、時代や国内外の様々

な要因の中で、ウィーン万国博や内国勸業博覧会などのイベントの活用と常設博物館の設置といった施策が重要な役割を果たしていたことを確認しておきたい。東京の博覧会事務局に集められた品物の内ウィーンへ送られたものはごく一部ではあったが、多くは常設された博物館（後の教育博物館、現在は国立科学博物館に継承）での展示に生かされていったからである。

越中国からの出展は少ないものだったが、幕末期の「薬品会など」と明治初期の博覧会等に出展された天産物の産地には、地形風土等によって産出数、出展数の多寡に当然地域差がある。当時の全国的な府県ごと、天産物の分類枠ごとの出展物の解析は、近世から近代産業史の研究の上でも必要な作業であろう。

また小論では本草学のつながりから天産物についてのみ論じてきたが、江戸から明治への連続性の中で学芸活動と近代化を論じる際には、人工物や旧器古物の保存、つまり美術工芸品、文化財保護もまた重要な視点である。明治政府はウィーン万国博のため各府県から物産の収集を行ったのとほぼ同時期に、各府県に命じて寺社などが所有する宝物を書き上げて提出させる調査（壬申検査）も行っていたからである。これについては、さらに調査を進めることで近代初期の文化行政と学芸振興のつながりを具体的に明らかにするものとして、今後の研究を俟ちたい。

図1 明治初期の「薬品会など」・博覧会等の過渡期模式モデル



### 謝 辞

ウィーン万国博覧会出品関連の史料閲覧に際しては東京国立博物館資料館に、近代の博覧会と越中に関する史料の閲覧に当たっては、富山県公文書館から

特にご便宜を計っていただきました。お名前を挙げてお礼申し上げます。



註

- 1) 以下小論中では、自然界から産出、採集された天然物、原材料で保存のため以外に加工を加えない動植物、鉱物、化石などの総称としてこの語を用いる。
- 2) 京都山本読書室物産会の展示品は『読書室物産会目録四十六巻付録』（武田科学振興財団杏雨書屋蔵 請求番号[杏5944]）により、ウィーン万国博での出展品は『澳国博覧会出品目録6』（東京国立博物館蔵 請求番号[H1873-144]）による。その他小論で用いた各地で開催された博覧会での出展品は『明治期府県博覧会出品目録』（東京文化財研究所美術部編 平成16）所収の史料による。
- 3) 『大和本草』巻之三には「硫黄凡温泉アル處硫黄アリ 信州浅間嶽越中ノ立山越後ノ妙香山肥後ノ阿蘇山日向ノ霧島肥前ノ島原スヘテ山ノヤケ熱湯ノ出ルハ皆硫黄ナリ」、『炮炙全書』には「當歸 按當歸以紫色者為勝 聞此種産越中州山中而人不知采為時用甚為可恨也」などの記載が見られる。
- 4) 『廣大和本草』禹余糧：「長州ニアリ 大和ノ生駒山ニモ多シ 又立山ヨリ信州エ越ルアイダニザンザラゴエト云処アリ 此地ニモマヽアリ」、鬼火：「富士浅間或ハ白山立山ナドニアリ 夜ル火ヲカヽヤカセルコト松明ノゴトシ」、骨碎補：「白山立山富士山ノ谷間ノ陰湿ニ地ニ産スル者根巨大」などの記載が見られる。
- 5) 『ドドネウス・クリュードベック』を指す。『ドドネウス草木譜』とも言う。レンベルト・ドドエンス著の博物書。江戸時代に日本にもたらされ、西洋植物学書の代表として日本の本草学に大きな影響を及ぼし、抄訳本も作られた。
- 6) 「牙消」は古来の芒硝（結晶硫酸マグネシウム）で、「馬牙硝」または「瀉利塩」とも言う。『物類品隲』には「越中五箇山産上品」とある。
- 7) 嘉藤潤一「加賀藩の薬草政策と立山」（富山県[立山博物館]平成20年度企画展図録『薬草と加賀藩立山から百味草筍への道をさぐる』）には、加賀藩による調査から採取された薬草の流通に関する詳細な論考がある。
- 8) 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵 史料番号 [特16.76-014]
- 9) 前掲「加賀藩の薬草政策と立山」参照。
- 10) 『越中立山古記録Ⅰ』（越中資料集成別巻2 広瀬誠 高瀬保桂書房1990）には、全文掲載。
- 11) 大阪市立自然史博物館蔵「畔田翠山腊葉帖」69冊のうち立山関係は「白山立山」の大包の中に「立山草」13葉、「立山木」6葉の標本がある。
- 12) 国立公文書館内閣文庫蔵。請求番号 [197-0026] 立山で採集した27種の植物を載せる。
- 13) 徳光浦は加賀国石川郡。越中国とあるのは誤記。
- 14) 西尾市岩瀬文庫蔵 請求番号：[函26番92号]
- 15) 『雲根志』には「形金色小細なり。おのおの方にして他の形なし。数粒塊まりて拳の多さに及ぶ。破れる時はおのおの方解す」とあり、黄鉄鉱などの結晶と思われる。柘榴石を指すこともある。
- 16) 伊奈川郡は信濃国。但しソブ川は越中砺波郡の赤祖父川を指すと見られる。付近に湧き出る水にはカルシウムを多く含んでおり、空気中の二酸化炭素と結合してできる石灰華が木葉の表面を包み込んで結晶化した「木葉石」や、水中の沈殿物に付着してできたものが化石として知られていた。
- 17) 『雲根志』には「越中砺波郡林道寺に鼓石あり、かたちまた鼓に似たり。たたく時はこえ数町に響くという。これ山海経に載するところの石鼓ならんか」とある。
- 18) 磯野直秀「日本の博物学」（『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学 7号』1989）20～21頁参照。
- 19) 本草学の守備範囲が広がって、薬草以外の天産物への興味関心が高まったことは生薬の薬効や植生を研究する本来的な分野の重要度が低下して、軽視されたということではない。あくまで本来的な役割としての意味は変わっていない。（この点を研究の上で見過ごしてはいけないことを、以前に山田慶児氏からご



- 教示いただいた。)
- 20) 早稲田大学図書館蔵 請求記号：[ヤ0900913]
- 21) 京都山本読書室では、当主山本章夫が明治27年に京都本草会を開き『京都本草会出展目録』が刊行されている。山本章夫は、博覧会事務局でウィーン万国博への出展に携わっている。近世本草学と近代博覧会の接点で仕事をしており、近世本草学を継承した「薬品会など」としての意味での開催と考えられる。
- 22) 東京国立博物館編『東京国立博物館百年史・資料編』553頁参照。
- 23) 芦峯寺一山会文書「慶応丙二寅年芦峯寺／寺社御触状留帳」
- 24) 長野県立歴史館蔵「久保田家文書」パリ万国博覧会関連文書 長野県立歴史館 平成9年夏季企画展図録『殖産興業と万国博覧会』20頁参照。
- 25) 前掲『東京国立博物館百年史』43頁参照。
- 26) 「かたち鱈節のごとく、長さ六寸、後先尖りて中太し。色薄白く、少し節立つ筋あり。中より二つに折れたるに、その折れ口を見れば、中同じにして外皮ばかりはなれたり」とある。また、明和3年4月15日に開かれた「東山物産会」にも出展された記録がある。
- 27) 富山藩士藤沢周が、立山で見聞した高山植物252点を描いた図を、木版摺り手彩色にして作った小型の植物図譜。巻頭の自序に「嘉永甲寅(1854年)」とある。江戸時代、立山の高山植物の認識と名称がわかる点で貴重である。全3冊のうち、富山県立図書館には1冊のみ所蔵がある。
- 28) 明治5年の壬申検査での新川県から報告の記録『貯蔵寶物取調／新川県』は東京国立博物館の所蔵。請求番号[歴資 1090-37]
- 29) 國 雄行『博覧会の時代』(岩田書院 平成17) 24～25頁参照。
- 30) 前掲『東京国立博物館百年史』60頁参照。
- 31) 前掲『東京国立博物館百年史・資料編』164頁参照。
- 32) とともに東京国立博物館蔵『諸国産物大略』請求番号：[QA-3496]、『五畿八道産物記』請求番号：[QA-3501]
- 33) 東京国立博物館蔵 請求番号[H1873-144]
- 34) 具体的な書名は、作られたリストに記されていないが、現在東京国立博物館蔵のウィーン万国博覧会関連資料の中で『五畿八道産物記』と同じマイクロフィルムロールの中には、『採葉使記』『廣倭本草』と一緒に撮影されており、これらも一連の資料として参照されていたことが推定される。
- 35) 氷見新港から東方沖合300m、石灰岩からなる小島。
- 36) 橋詰文彦「万国博覧会の展示品収集と「信濃国産物大略」(『長野県立歴史館 研究紀要』第4号1998)
- 37) 椎名仙卓『日本博物館成立史』(雄山閣2005) 147頁参照。
- 38) 『石川県史料』所収。引用は『富山県史史料編VI 近代上』512～514頁による。
- 39) 橋詰文彦「田中芳男と万国博覧会－明治期における実務官僚の役割－」(『長野県立歴史館 研究紀要第3号』1997) 64頁参照。
- 40) 東京国立博物館蔵 請求番号：[H1873-011]『日本帝国出品目録』の名称も併記している。
- 41) 東京大学コレクションXI『和田鉞物標本』(田賀井篤平編 東京大学総合研究博物館2001)「府県金石試験記」の項参照。
- 42) 『学問のアルケオロジー』(東京大学 平成9)「第4章教育の整備－東京帝国大学の創設と列品の思想」吉見俊哉「博覧会と列品の思想」の項参照。
- 43) 前掲『学問のアルケオロジー』「第1章混沌の時代－開成所と物産会」大場秀章「伊藤圭介」の項参照。
- 44) 前掲『和田鉞物標本』「府県金石試験記」の項参照。
- 45) 地元芦峯寺で当時を知る志鷹義勝氏からの聞き取り、及び佐伯泰正「むかしあったとお～(立山)のちょっと昔の話②芦峯寺駅」(「たてはく」50号2004・5)参照。
- 46) 『石川県史料』所収。引用は『富山県史史料編VI 近代上』516～520頁による。
- 47) 金山喜昭『日本の博物館史』(慶友社2001) 68～73頁参照。